

2-32-2 金龍院

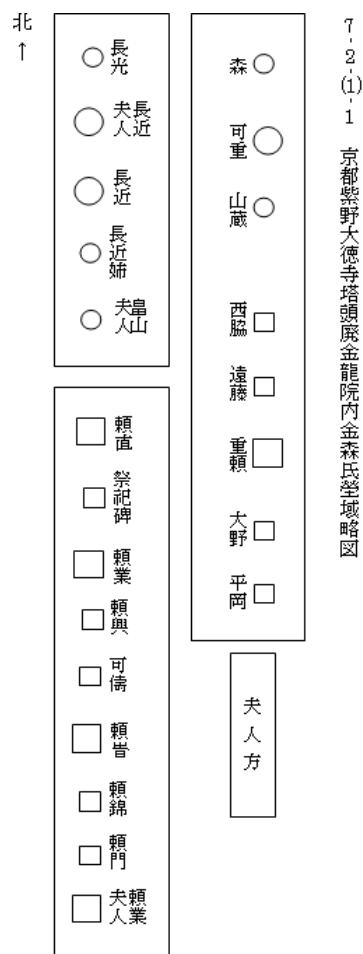
(①は『越前大野城と金森長近』一八四～一八六頁より)

① 大徳寺塔頭金龍院墓所

金龍院は京都紫野大徳寺境内にあり、金森長近が菩提寺として建立したものである。寺内の西北はやや高き丘形となっている。この丘上に金森家本家代々の墓並びに奥方あるいは殉死者の墓もある。さらに金森家代々の将士にして戦死した者、及び敵軍戦死者の霊を祀った祭祀碑もある。

しかるに明治時代に至り、金龍院は廃寺となり、その寺地は京都市の切なる要望により入れられて今は京都市のものとなっている(今はテニスコート)。従って金森家代々の墓は、同じく大徳寺塔頭龍源院に移された。金龍院にあった時の墓の配列は右図のようである。

○型は五輪塔、□型は棹石で大小は身分を示したものである。祭祀碑は金森家累代の将士にして戦死せるもの及び敵軍であった将士で戦没した霊を祀ったものである。



金森累世将校及敵軍狂靈祭祀碑

絶待英靈後_二天地_一而不_レ凋、刹那三際、萬劫且暮、繩繩今不_レ可_レ名、蓋存樹風□、没著徽烈、古之道歟、百骸潰散之人、真性尚存、君臣義如之何其廢_レ之、金森出雲源頼門知_二其然_一也、乃寄_二銀百両_一、以給_二祭祀_一、庶幾感_レ靈慰_レ神、而不_レ辱_二忠臣義子之分_一乎、臣無_二二心_一天之制也、秉_二国之均_一、四方

維断断無_二他拔_一、蹇蹇匪躬之故、拔_レ奇夷_レ難举_レ賢援_レ能、不_二以_レ私汚_レ義、不_二以_レ利傷行、絶耳分少惟和惟一、至_二於白虹貫_レ日大白□_一昂、其不_レ可_レ測之最也、失_レ性心失_レ真、認_レ物為_レ己、輪廻是中、自取_二流転_一、是以誑誘移_レ俗、姦訛若_レ風、重諾千金、銜_レ感一劔、割_レ慈忍_レ愛、離_レ邦去_レ家、偶決_二兵機_一、骨肉棄_二於塵埃之域_一、落_二奸計_一、身首散_二於刀斧之前_一、不_レ憑_レ棺、葬不_レ送_レ野、滯魂難_レ解、幽魄何依、非_二仏如来_一不_レ足_二以度_レ之、□如_二大雲以_一一味雨_一潤_中於人華_上、各得_レ成_レ実、茲勒_二堅珉_一、有_二辞於永世_一、窮沢再流、顛

木重榮、可_二坐而致_一、是源頼門之志也、自_二大永_一至_二宝曆_一凡二百四十年、功_二勲其家_一者、奮_二死其義_一者、敵国之士授_二首其手_一者、及郡国戦跡三十六所、名状別具、

祭祀碑

右祭祀碑は、金森本家第八世頼門が本家改易、のち第七世頼錦が、南部盛岡に配流中元祖長近以来代々愛敵の美德を追悼し金百両をもって金龍院に建てたものである。敵の亡霊を自家累世戦没将士と同一に祀る衷心は、我が国武門の精萃である。この建設は宝暦十一年（一七六一）で頼錦が南部に流された四年後である。もちろん頼門も流適の身であった。金森氏代々の領主が敵戦死者を味方戦没者と同様に悼み菩提を弔い、祭祀碑を建立せる心情は武門の亀鑑とすべきである。